

【講演レポート】

JISA特別協賛 復興チャリティ講演

谷川浩司九段の『いま、一人ひとりができること～東日本復興に寄せて～』

東日本大震災から半年になろうとする平成23年9月2日、東京・赤羽会館で、復興チャリティ講演「いま、一人ひとりができること～東日本復興に寄せて～」が開催された。主催は、歴代JISAコンベンション講師を中心とした谷川講演実行委員会、JISAは特別協賛として運営面で全面的に協力した。協賛は、(株)シーエーシー、徳田税理士事務所、(有)メイ・テック、日本橋「結ぶ」の4社。

和歌山、奈良を中心に大きな被害をもたらした台風12号の進路予報が一日ごとに変わり一時は開催も危ぶまれたが、当日は台風の影響が懸念される中、JISA会員、将棋囲碁ファン、一般、招待者等280名が参加した。

第一部は、日本将棋連盟・谷川浩司九段と聞き手・中村雅子アナウンサーによるトーク形式の講演で、途中から日本棋院・王銘琬九段がゲストとして加わった。谷川九段は阪神・淡路大震災(1995)の被災者であり、避難経験やその後のタイトル戦での心の変化、東日本大震災への想いを語った。以下、主な発言を紹介する。



- ・3月11日14時46分はテレビもつけずにのんびり過ごしていました。その後、宮城県の名取川を津波が逆流する映像を見て愕然としました。阪神・淡路を超える大災害が起きた、と。
- ・被災地というのはなかなか情報が入りません。阪神・淡路大震災では、電気、ガス、水道が止まり、ラジオを聞いても神戸の震度が分かりません。震度計が壊れたのかも知れません。周辺地域の震度から、神戸の揺れを想像しました。
- ・当時住んでいた六甲アイランドから対岸に渡る橋は2本ありますが、1本は不通。もう1本はLPGタンクのガス漏れの危険性があり、翌日、急遽島の外れに避難することになりました。命の危険を感じました。昼ごはんは、どなたかが持ってきてくれたおにぎり・パンの配給に並びました。ペットボトルは一家で1本だけでした。
- ・避難解除となり、対局のため大阪に車で移動するとき、初めて対岸の惨状を知りました。家は倒れ、どの道がつながっているかわからない、生き埋めの人がいるかも知れない横を、何の手助けもできずに通り過ぎる自分に罪悪感を覚えました。



- ・棋士は、自衛官、警察官、消防士ではないので、災害直後は役に立ちません。大阪に入り、震災後、初めて温かいものを食べ、お風呂にも入りました。今まで当たり前だと思っていたことが、実はそうではないことを感じました。
- ・そんな中で対局に臨んだのは『本能』のようなものです。自分にできるのは将棋を指すことでした。日程の延期は考えませんでした。初心を忘れかけていた時期でもあり、改めて将棋を指せる嬉しさを感じました。負けることが怖くなくなり、しばらくは好調が続きました。
- ・震災直後は不思議な高揚感、連帯感がありました。世間は羽生さんの七冠なるかという話題で持ち切りでしたが、私は王将位を4勝3敗で防衛できました。このときは、神戸を代表して戦っている意識がありました。
- ・一年後、驚くことに羽生さんは6タイトルを全て防衛し、更に王将戦の挑戦者になります。一方、私はどの挑戦者にもなれませんでした。震災後の高揚感は長続きしません。4連敗はだらしなかったですが、勝負は始まる前からついていました。
- ・羽生さんは七冠、私は無冠になり、比較すらできなくなりました。結婚報道とともに連日テレビに出る羽生さんは時の人、別世界の人です。これがきっかけで、逆に彼に対する過剰な意識が薄らいでいくことになったと思います。
- ・無冠から竜王、名人を奪取できたのは、気持ちの問題が大きかったです。普段の研究は続けていましたし、今にして思えば簡単なことですが、初心に戻って自分の将棋を指し切る、それが結果につながったのだと思います。
- ・将棋には3つの大切な言葉があります。最初に『お願いします』、最後に『ありがとうございました』、そして一番大事な『負けました』です。
- ・自由に駒を動かす楽しさがある反面、勝ち負けの責任は自分でとらなくてはいけないという辛さ、厳しさがあります。将棋を通して、自由と責任、ルールとマナーを小さいときから、お子さんには考えてもらいたいです。
- ・私自身、モチベーションを持ち続けるために、努力とか頑張るというのではなく、夜寝て朝起きて一日3回食事をするように、生活の一部としてごく自然に対局に臨む、また、研究、観戦、詰め将棋などいろいろな引き出しを持つことによって、常に新しい気持ちで将棋に向き合うことを心がけています。
- ・(情報化と将棋という観点では) コンピュータ将棋、インターネット対局、棋譜入手が便利になった今、アマチュアのレベルは上がり、アマ四段程度に到達する小学生も増えました。ただし、不便な昔とは違い、伸びしろがあまりないままそのレベルになってしまうと、後々苦勞する場合があります。



- ・被災地のみなさんには『頑張りすぎないでください』と申し上げたいです。被災直後はともかく、時がたつにつれ、張り詰めた気持ちで長く頑張ることは難しいです。
- ・最初は同じ被災者でも、そのうち100%元に戻れる人もいれば、50%の人もいます。中には立ち直れない人もいます。頑張るのは被災地以外の私たちです。

- ・大被害3県の600万人を全国の成人1億人が支えたとすると、16～17人で1人を何らかの形で支援する計算になります。
- ・阪神・淡路から16年が過ぎ、震災孤児・遺児はようやく高校卒業や成人に達する年齢になりました。今回は、午後の地震、津波だったので、家族バラバラで孤児・遺児はもっといるかも知れません。長期的な支援、教育支援が必要になるでしょう。
- ・被災者への義援金だけでなく、実際に現地で活動しているNPOやボランティアへの支援も今後ますます重要になってきます。
- ・プロ棋士は震災3日後に『将棋を教えに来ました』ではなく、他の文化・芸術と同様に、衣食住が足りた頃に本当の出番があります。チャリティイベント、現地での指導対局やタイトル戦の開催など、様々な方法で支援していきたいと思っています。
- ・被災者にとって一番辛いのは、『忘れ去られること』です。私たちも、毎日地震に怯えていては生活できませんが、年に何回かは自然災害を思い起こす機会、家族で話す機会を持つことが必要と思います。
- ・個人的なことですが、うちの下の子が福島から避難して来た子と仲が良くて、家にも遊びに連れてきました。小2が自然にできることも少しは役立つかなと思いました。



台湾からは、国・地域別では最多と言われる約200億円の義援金が寄せられている。王九段は「台湾にとって日本は『単なる一外国』ではないんです。台湾大地震(1999)の恩返しということだけでなく、古くからの日本・台湾の関係もあり、今回の震災も他人事ではなく、自分たちの痛みなんです。谷川さんがおっしゃるように、長い支援や忘れないことが大切で、そのためには被災者を自分のことのように思うことで、自然に長く関わっていけるのではないかと思います。今後、囲碁・将棋で一緒になって何かイベントをしたいです」と述べた。

元・福島テレビ勤務の中村アナは、福島県の市町村をほぼ全て取材した経験があり、原発問題をはじめとした現状を深く憂慮している。「できることなら飛んでいきたい」と涙ぐむ場面もあった。



第二部は、シンガーソングライター竹仲絵里さんのミニライブが行われた。竹仲さんは、震災直後に自宅からYouTubeで「おなじ星空の下で」を配信するほか、被災地での復興イベントにも積極的に参加している。一度、視聴をお勧めしたい。

http://www.youtube.com/watch?v=esXpFDiWwlQ&feature=player_embedded



募金総額41万1,263円は、谷川講演実行委員会から、公益財団法人日本財団ROADプロジェクト「東日本大震災支援基金」に送られた。

(文責：高松)